

同 和 問 題 （ 道 徳 ） 学 習 指 導 案

平成3年5月30日（木）5校時

板 野 中 学 校 3 年 E 組

男子19名、女子18名 計37名

指 導 者 阿 部 憲 作

1 主 題 誇りうる生き方を求めて

2 主題設定の理由

昨年板野中学校に赴任し、どれだけ被差別の立場に立って同和問題を語れるか、共に歩めるかが問われるんだという思いでいっぱいであった。しかし、「被差別の立場に立ちきる」という言葉は理解できていても、私の心は子どもたちを前にして揺れ動いていた。部落問題を語っている時、食い入るように目を輝かせる子どもがいれば、下を向いてしまう子どもがいる。下を向いてしまう子どもに「私が助けてやろう」という子どもたちより一段上の立場から救いをさしのべようとする傲慢さがあった。また、部落と言われ差別される側にある子どもたちを前にして自分を語る時に、腹の底にある言葉を選んで語ろうとする意識、同情心に揺れていたと反省する。それはKさんの生活ノートに「はつきりいつて先生も私は疑っている。口先だけって感じがしたからだ。きれいごとなんかいらぬから自分の本当に思っている言葉を私たちに聞かせて欲しい。」と書かれてあることから明らかである。子どもたちはまさに教師の生き方を厳しく見つめている。私は子どもたちに信頼される教師でありたいといつも願ってきたが、部落の子どもたちを通して信じ合い、共に部落差別と闘って生きることがいかに難しいかを教えられた。また、昨年の全体授業の後Kさんは「私はこんなに苦しんでいるのに、言えない、手が上がらない。……みんなに伝えたかった。部落って言うのがどんなものかを……。情けない……。」これはKさんの責任ではなく、Kさんの言いたいことが言える仲間づくりができなかった私の責任であり、Kさんを苦しめているのは私自身である。Kさんを通して学んだこと、反省したことをエネルギーにし、3年生E組を担当することになった時、「丸岡忠雄さんの言葉である『お前だったら、絶対、俺の一番恥ずかしい部分が言える』そんな学級の仲間でありたい。人間でありたい。」と語り、最終学年のスタートをきった。

あわただしい学校生活が続く、まだまだ私は自分自身が語れてない。今、丸岡忠雄さんの「同和教育の希い」を通して少しずつではあるが前に進んでおり、また、体育館で行なわれる各学級の公開授業を通して部落問題学習を深めつつある状況である。5月23日の全体授業で、YさんとM君が「自分は部落出身である」とはつきり部落宣言をした。授業後のYさんの感想文には「これでスッキリしました。もう何も隠すことはありません。あとはもうれつに差別に立ち向かっていくだけです。……M君も部落出身であることを打ち明けました。私はあんな勇気のある友だちがいてとても幸せです。……これからどんな差別が待ち構えているか分かりません。でも、M君やまわりの人たちと一緒に差別に負けずにがんばっていきたいです。」と書

いてきた。私は体が熱くなった。こんなにもすばらしく必死に生きている子どもたちを前にして、この子どもたちを決して苦しめてはいけない、悲しませてはならない、そう誓う。まわりの子どもたちも「M君やYさんは自分が部落の人だと言ったのは、ぼくたちを信頼していることだから、ぼくたちもその気持ちにこたえてがんばっていかなくてはいけないと思います。」

「熱くなるという言葉がぼくの心に今日はつきりと感じられた。今までの自分とは全くかけ離れた気持ちになったような気もした。……なんか今までの自分が情けなく思えた。」と応えている。M君やYさんの言葉が、まわりの子どもたちに感動を与え、生き方を変えようとしている。高め合おうとしている。しかしながら、「私には言う勇気がありません。やっぱりみんなの目があるし、こわいという気持ちがいつも勝ってしまって自分の心が開けないままいままです。」と書いてきた子どもたちがいる。また、「みんなの前では言えないけど、このまま隠し続けるのもいやだし、隠しても分かることだし、自分の気も苦しいし、いつか言わないとだめだと思うから、早く言えるようにもつと勉強して、自分の出身を言えるようになりたいです。」と書いた子どももいる。まだまだ苦しんでいる子どもたちが目の前にいる。

資料「意識の芽ばえ」は、丸岡忠雄さんが高州に生まれ育ってきた中での意識、それは「ふるさと」を誰に教えられたというのではなく、生命を守るために本能のように隠すことを覚えた部落差別の歴史そのものである。同時に、丸岡さんを苦しめてきたものは、丸岡さんの責任ではなく、差別する側の責任であることを私たちに訴えている。その丸岡さんを「黙くことよりも怒ることだ!!」と変えたものは、本当のことを学ぶ勇気、解放への熱い想いと同時に共に部落差別と闘う仲間との出会いであったことが分かる。今まさに目の前にいる「ふるさと」が名のある、部落出身であることが言えない子どもたちと丸岡さんの生きざまが重なり合う。「ふるさと」を隠すことから名のあることへと自己変革した丸岡さんの誇りうる生き方に共感して欲しいと願う。そのためには、「ふるさと」を隠して生きることがどれだけ自分を苦しめて生きることになるか、また、「ふるさと」を名のあるためにどれだけ深く信じ合わなければならないか、そして、部落に生まれたことが恥ずかしいのではなく、恥ずかしがるのが恥ずかしいんだということ、差別する側の責任だということを私たち一人一人が考え、また、みんなで考えていきたいと思う。そこまで自分を高めていきたいという願いでいっぱいである。丸岡さんのように人間として共に部落差別と闘う誇りうる生き方をしたい、仲間として共に部落差別と闘う誇りうる集団でありたいと願い、本主題を設定した。

3 ねらい

丸岡さんの誇りうる生きざまに共感させ、部落差別は絶対的に差別する側の責任であることを理解させると共に、言われのない部落差別に憤りを持たせ仲間と連帯し、共に部落差別解消に取り組むことが人間として誇りうる生き方であることを理解させたい。

4 視点 真実と正義

5 指導計画

- (1) 常時指導 学級目標「熱と光と」を合言葉に、人間として熱く生きる、学級の一人一人が輝いている、人間が尊重されることを学級の思想になるよう、語りかけ、対話をし、互いに高め合う学級集団を作りたい。

- (2) 関連的指導 道徳科 「峠」

「大きな喪失に絶えてのみ 新しい世界が開ける」人間は変わっていくものだということを理解し、よりすばらしい現在の自分であり続けようとする態度を育てたい。

- (3) 核心的指導 道徳「同和教育の希い」・・・・・・・・・・ 3時間

道徳「意識の芽ばえ」・・・・・・・・・・ 2時間（本時2／2）

丸岡さんの誇りうる生きざまに共感させ、部落差別に憤りを持たせると共に、仲間と連帯して、共に部落差別解消に立ち上がる実践力を育てたい。

- (4) 発展としての関連指導

学活「すばらしい生き方に学ぶ」・・・・・・・・ 1時間

これまでの同和問題学習を通して、部落の人たちのすばらしい生き方から何を学んだか、また、自分は同和問題とかかわってどう生きるのかを話し合い、さらに、部落差別解消に向けて自分は何をすべきかを考え、実践する態度を養いたい。

- (5) 常時指導（発展）

部落問題を自分の問題としてとらえ、部落問題学習を通して自分を高めていく態度を身につけさせたい。さらに家庭・地域社会において部落差別解消に取り組む実践力まで高めたい。

6 本時の指導

- (1) 目 標

丸岡さんの誇りうる生きざまに共感し、部落差別と自分自身とのかかわりを明らかにさせると共に、部落問題にかかわってどう生きるのがすばらしいのかを考えさせる。

- (2) 展 開

学 習 活 動	主な発問と期待される生徒の反応	指導上の留意点

① 厳しい部落差別の中を生き抜いてきた親たちの願いについて考える。

○「ふるさと」を隠すということを教えなければならなかった部落の親たちの想いや願いについてどう思うか。

- ・自分たちが受けてきたような冷酷な差別を絶対に受けて欲しくないという願い。
- ・部落出身がわかれば、いつ差別されるかわからないという不安、恐れ。
- ・差別によって命さえ奪われる。その命を守ることを教えなければならなかった。

○「ふるさと」をあばかれることによって、命さえ奪われる部落差別の厳しさを自分のこととして考える。

○自分の親と重ねて考える。

② さしさわりのないウソについて「ふるさと」を隠さなければならなかった丸岡さんの苦悩について考える。

○さしさわりのないウソについて「ふるさと」を隠さなければならなかった丸岡さんの苦悩についてどう思うか。

- ・誇るべき兄や母の仕事を隠さなければならぬ不安、恐れ。
- ・誠実に生きている人たちの住む「ふるさと」を名のれない苦しさ。
- ・「部落」の正体がわからないことが丸岡さんを苦しめた。
- ・真実を知りえなければ、「ふるさと」を名のることができない。

○「部落」のことについて何も知らない、わからないことが丸岡さんを苦しめたことに気付かせる。

③ 「ふるさと」を隠すことから名のることへと自己変革した丸岡さんの生き方について考える。

○「ふるさと」を隠すことから名のることへと丸岡さんを変えていったものは何か。

- ・「部落」の正体が、必死に学ぶことによってわかったから。
- ・被差別に立つ人に責任があるのでなく、差別する側に責任があることがわかったから。
- ・潤間先生と出会って、真実がわかったから。
- ・多くの仲間の支えがあったから。
- ・言われのない差別に苦しめられた怒りが爆発したから。

○「歎くよりも怒ることだ！」の持つ意味

○本当のことを知ることによっていかに人間を強くしていくかに気付かせると共に、心から信頼し合える仲間がさらに人間を強くしていくかに気付かせる。

○「部落」に生まれた

	について考える。 ・ 部落に生まれたことが恥ずかしがったり隠してはならないということがわかった。 ・ 真実を知ることによって湧き起こった怒りを、部落差別解消のエネルギーに変えた。 ・ 部落差別と闘って生きることが誇りうる生き方なんだ。 ・ 怒りをエネルギーにして、一生懸命部落問題に取り組みたい。	ことが恥ずかしいのではなく、恥ずかしがる ことが恥ずかしいんだ ということ、また、湧 き起こる怒りを、部落 差別解消のエネルギー とさせる。
(補助発問)	○丸岡さんが「ふるさと」を隠すことら名のることへと自己変革した生き方について どう思うか。 ・ 堂々と「ふるさと」の名が言える生き方をずっとしていきたい。 ・ 部落差別の解消に生命をかけたすばらしい生き方をしたい。 ・ 人間として誇りうる生き方をしたい。 ・ 心から信じ合える仲間をつくっていききたい。	○丸岡さんの誇りうる 生き方に共感させ、人 間として共に部落差別 と闘う意欲をもたせる
④「意識の芽ばえ」の 学習を通して自分の変 容を語る。	○「意識の芽ばえ」の学習を通して、丸岡 さんが変容してきたように、自分がどう変 容してきたか。 ・ 自分が「部落」であることが言えない苦 しみがあったが、堂々と言えるようになった。 ・ 部落の人たちの悲しみ、怒り、願いがよ くわかるようになった。 ・ 今まで逃げていたが、逃げないで堂々と 部落差別と闘いたい。 ・ 自分とは関係ないものと思っていたが、 まさに自分の問題であることがわかった。	○自分の変容を語り合 い、仲間と連帯して、 部落差別の解消に向け て、共に闘う意欲を高 める。

「部落」という意識、何歳頃からこの意識は目醒めてくるものだろうか、私自身ふりかえってみてはつきり記憶していることがある。

小学校四年生の秋だった。同じ部落から毎日学校へ一緒に行く友達のF君がこんなことをいった。

「おれたちは、よそのもんとはちがうんだぞ。部落といつてな、これなんだぞ」と、さも知ったように四本指を出した。

「なに、四本指を出してどういう意味か？」ときき返したが、はつきりしたことは彼も知らなかった。ただよそとはちがう、ちがうから馬鹿にされているということだけを知った。

それまでにも、家の者からよく次のようなことを言われた。

「学校へ行つて先生や友人に、兄さんが肉屋の店をしていることを決して言つてはならないよ」

「家で、わし（母）がわらぞうりを作っていることを話すんじゃないよ」

子供心にもそれは強い不安を私に植えつけていて、どんなに心をいためたかしのれない。それはどういう理由からか母にききかえすことは出来なかった。

〈遠い町で立派に店を構えてやっている兄、誰よりも親孝行で弟思いで、曲つたことは決してしなかつた兄、小さい時から奉公して、その年期があけて一人前に店を出している兄の商売をどうして他人に言つてはならないのだろう〉〈母の作るぞうりは、誰が作つたものよりも丈夫で、はき心地がよかつた。学校で習う二宮金次郎だつて、ぞうり作りをしていたと修身の本にあつたではないか。母がよなべでぞうりを作ること（それは殆んど近所の農家に行つて米になつたり、現金にかえられたりした）が、どうしていけないのだろうか〉

幼いなりに不思議でならなかつたが、それがいい知れない不安となつて胸一杯に黒い翳りをつくり、そのことを口にすることが恐ろしくなつた。そうした話題が出ると、さしさわりのないウソをつく知恵を、誰に教えられることもなしに覚えてしまつていた。

その不安が、このF君の言葉ではつきり定着させられてしまつた。〈ああ、やつぱり僕たちはよそとちがうのか〉そうした絶望的な想いが広がり、タカスという生まれながらのふるさとの名を口にすることが苦痛になつた。『あなたのお所はどこですか』と訊かれる度に思わずドキリとして素直に口に出ず、『駅の少し東の海辺です』とか『川口（隣接した一般部落）です』とか言つた。タカスと言うふるさとの重みが、年ごとに耐えられぬほどにこたえてくるようになっていたのである。

中学二年を終えて、ふるさとをはなれて熊本の学校へ入つたが、私にとって“部落”は絶対的なタブーであつた。まだ、若い少年達の集団生活の中で、部落のことはよく話題にのぼつた。地元の熊本の少年もそうだったが、特に京都から来ていたM君がしばしば話題にしていたが、

京都ではそれだけ問題が多かつたのだろう。そうした話題が出たときも知らん顔でその話題に加わつたりした。こんなわけで、異郷でくらす私にとって、私の事を知っている故郷の者と出会うことは、何より恐ろしいことだつた。故郷の者に会えるという喜びより、私のことをしゃべってしまうのではないだろうかというおそれの方が先立つからであつた。

こんなにも私を苦しめる”部落”でありながら、しかし二十歳近くまで私には全然”部落”というものが解つていなかった。その現状は勿論のこと、部落の歴史についても進むべき方向についても、まるで見当のつかないことばかりであつた。こんなに強い差別が残っているからには、きつと異民族の後裔にちがいない。或は、よほど悪いことでもしている罪人の末とでもいうのだろうか。または、何か決定的な悪い遺伝でもあるというのだろうか。あれこれと想いめぐらしたけれど、誰も教えてくれるものはいなかつたし、読むべき本も知らなかつた。

こんな不安と怖れのままで、小学校の代用教員となつた私が、教え子からいきなり四本指つきつけられて大きいショックだつたことはいふまでもない。まるで正体不明の怪物に首をしめつけられている想いであつた。不安は大きくなるばかりで、私には抗するすべがなかつたのである。

不安と焦燥の中で、折角の勤め先も面白くななくなつた。たつたそれだけのことと思えるのだが、正体が解らぬことがいつそう私を焦らだたせた。この黒い日々には、はつきりと光を与えてくれたのは、その後、師範学校研究科に在学中（小学校在籍のまま研修のため半年通わされた）に於ける潤間（うるま）先生との邂逅である。終戦間もない頃であつた。まだ、終戦中の皇国史観のカラをくつつけた私たちにとって先生の話は、青天の碧瀝とも言える程に新鮮なものであつた。先生の元で、まとめたレポート「部落について」は私の人生観にはつきりした道標を与えてくれた。私のレポートは部落の歴史について、ごく概略的に、あちこちの本からの抜き書きしたもの過ぎない粗末なものだつたが、それでもそこに見る部落の生いたちは、私にとっては全く未知のものであり、まとめながらも激しい怒りを抑えることができなかった。私たちの先祖は何も悪いことをしていたわけではない。日本民族以外の何者でもない。それは為政者が、人為的に作つた階級ではないか。それも実に巧妙に、下層の農民を”生かさず殺さず”式に徹底的にしぼり取る為に、農民の下にその苦しい不満のはけ口としてこしらえたものではないか。明治維新と大きく時代は変つても皇族、華族、士族、平民といった階級をそのまま温存するような政府が、一片の太政官布告で穢多・非人の解放令を出したところで、それが実質的な解放と程遠いことは当然のことだろう。私は真実を知つてはじめて眼のさめる想いがした。歎くよりも怒ることだ！後年私が部落についての詩を書くようになった所以である。